

オケイシーの戯曲：「コケッコッコー伊達男」を中心に

鈴木, 良平

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

27

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

1993-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004564>

オケイシーの戯曲

——『コケッコッコイ達男』を中心に——

鈴木良平

1 はじめに——オケイシーとジョイス——

Sean O'Casey (1880~1964) と James Joyce (1882~1941) は、ほぼ同時代の作家である。オケイシーの方が二歳年長で、二十年以上も長生きしたけれども。しかし、二人の経歴を見ると、ジョイスが若くして語学や文学において天才ぶりを発揮したのに対して、オケイシーは大器晩成というかおこてであって鈍才の努力型というほかない。ジョイスは小学校時代から秀才で、家が貧しくて中退すると、校長の推薦でイエズス会系の学校に授業料免除生として編入学し、そこでラテン語、フランス語、イタリア語などを学んだ。16歳でダブリンのカトリック系の University College に入学し、20歳で卒業する。

それに対してオケイシーは眼が悪く、半盲に近いせいもあって小学校すら卒業していない。父親が6歳の時に死に、家が貧しかったせいもあって、14歳の時から働きだしている。そして処女作『狙撃兵の影』がアベイ座で上演されたのが1923年、オケイシー43歳の時であった。

その頃ジョイスは何をしていたかといえば、世紀の奇書『フィネガンの通夜』の執筆を開始している。1918年から雑誌に『ユリシーズ』の連載を始め、それが世界中の文学者たちを驚嘆させ、20年にはパリに移住し、22年には単行本として『ユリシーズ』を出版し、大家としての地位と名声を勝ち取っていた。まさに月とすっぽんの違いである。

ちなみに、この年1923年にアイルランド文壇のボスであるイエーツは、ノーベル文学賞を受賞して、ボスとしての権威・権勢を一段と高め、オケイシーの文学活動に口をさしはさむことになる。詳しくは3章で述べるが、結果的にオケイシーはアイルランドに居られなくなって、ジョイスに遅れること24年、48

歳にして英国へと亡命する。まことに愚図なのだ。若きジョイスがアイルランドを去らなければ、アイルランド国内で迎ったであろうような運命をオケイシーはたどっている。その意味ではあたら働き盛りの24年を浪費したにも等しいわけで、その分だけオケイシーは長生きしなければ割りに合わないことになる。それで帳尻を合わせるかのようにオケイシーはジョイスよりも23年（2歳年長であることを考慮にいれると25年）も長生きしたのである。要するに、ジョイスとオケイシーは、ポジとネガ、表と裏の関係にあった。

1932年にイエーツ、バーナード・ショーなどが中心となって、検閲制度などに対抗する手段として「アイルランド文学アカデミー」が設立されるのだが、オケイシーはジョイスとともに入会を拒否している。「この『アイルランド文学アカデミー』のなかでおこなわれる退屈な権威の検閲の方が、アイルランドの未来の作家たちにとっては、国家と教会によっておこなわれる検閲よりも、はるかに危険であろう」（『書簡集』（I）1932年10月11日、以下（I）と略す）⁽¹⁾と云って。

そして、39年にジョイスの『フィネガンの通夜』が英・米で同時出版された時に、アイルランドの新聞にはその著者がオケイシーと報じられた。その記事をバリで読んだジョイスから英国在住のオケイシーに手紙が届く。（（I）39年5月26日）

「アイルランドの新聞には『フィネガンの通夜』の著者がミス・プリントで Sean O'Casey となっているのに気づきましたか」という趣旨の。それに対するオケイシーの返書（5月30日）は次のようなものであった。

「わたしの精神には『フィネガンの通夜』のような作品を書く強靱さはない。そのような力量があればよいと願っています。……それは驚くべき本です。……いつか我々が出会うことを強く希望します。……それはミス・プリントではないでしょう。わたしはダブリンの文学的徒党の連中が、わたしを嫌っていること、そしてあなたを憎んでいることを知っています。だからその「ミス・プリント」はふざけてやったのです。……やつらとやつらの文学アカデミーが絶大なのですから。」

そして、手紙の末尾の挨拶の語句として

A deep bow to James Joyce

Yours very sincerely
Seao O'Casey

(イタリックは引用者)と書くのだ。A deep bow とか very sincerely などという言い方は見たことがない。二歳年下のジョイスを、オケイシーがいかに尊敬していたかが分かるような表現だと思ふ。

ついでに「書簡集」のことについて言えば、二人の作家の対照に驚かされる。ジョイスの手紙には、妻ノラに宛てたポルノまがいのエロティックな手紙が多いので有名だが、はるかに年下のアイルランド人の女優と結婚したオケイシーには、妻に宛てた手紙はエロティックなものはおろか、一本もない。また、ジョイスは政治的事件などを無視して、マスコミなどに投書することはないのだが、オケイシーは驚くべき愚直さで政治的事件などに対応し、反応しているのである。その点ではオケイシーはショーに似ている。

以下、オケイシーの略歴にすこし触れたい。彼がプロテスタントであること、そのくせ父方の親戚はカトリックであるという事情が、彼の生き方や作品に微妙な影響があったと思えるからである。ジョン・オケイシーはダブリンの少数派のプロテスタントの家庭に John Casey として生まれた。勿論、アイルランドでもプロテスタントはいる。オスカー・ワイルド、ショー、イエーツなどの文学者や、ウルフ・トーン、エメット、バーネルなどの共和主義者などもプロテスタントであった。しかし、1880年代のアイルランドでは80%がカトリックであった。しかもオケイシーの場合は生粋のプロテスタントではなかった。英国系のプロテスタントはたいてい上流階級の裕福な人が多かったのだけれども、オケイシーの場合はそうではなかった。父親は西部地方の農家の出で、両親、兄弟姉妹がカトリックでありながら、自分ひとりだけがプロテスタントになり、家族に違和感をおぼえ、家を離れてダブリンに出てきて、プロテスタントの4歳年上の女性と結婚した人間なのである。父親は店員や教会関係の仕事をして、給料は文字通りの平均程度で、一家は中流の下の生活ぶりであった。だが、その父親がオケイシー6歳の時に死んでしまうと、一家は貧困におちいり、長姉、兄などのわずかの仕送りで生活していたのである。

1890年、オケイシー10歳の時に、アイルランドの「無冠の帝王」と呼ばれたアイルランド国民党の総裁バーネルが、女性問題で失脚し、やがて死んだ。この事件は8歳のジョイスに大変なショックを与えたので有名な事件だが、オケイシーもまた大変な衝撃をうけたのである。14歳の時から働きだし、20歳すぎから鉄道会社で肉体労働者として働くかわら、ゲーリック同盟に加入しアイルランド語を学ぶと、名前をアイルランド風に Sean O' Cathasaigh と変え

た。また IRB（アイルランド共和主義者同盟）にも加入した。（この頃、ノルウェイの劇作家イブセンの中に理想の作家像を見出したジョイスはアイルランドを永久に去っている）。そして、パーネルに代わる指導者としてオケイシーが見出した人物は、労働運動の指導者ジム・ラーキンであった。オケイシーはラーキンの労働組合に加入したがために9年間勤めた鉄道会社を解雇される。だが彼の社会主義的な立場は周囲のナショナリズムの立場とうまくゆかない。それでいくつかの組織から離れた。

1913年、ラーキンとともにダブリン・ストライキを闘う。そして ICA（アイルランド市民軍——労働組合左派）を結成し、副議長ラーキン、書記長オケイシーとして実権をにぎるが、ここでもナショナリズムへの傾斜に抗しきれず、ラーキンもオケイシーもやがて辞任する。（詳しくは、オケイシー著 *The Story of the Irish Citizen Army* を見よ）。ナショナリズムに批判的な立場のオケイシーは1916年のイースター蜂起にも参加しなかった。（それはアイルランド労働党の立場と合致するように思える。労働党もイースター蜂起を批判したが故に、アイルランドの民衆の支持を失い、いまだに少数野党としてとどまっている。）少数派のプロテスタントとして生まれ、育ったオケイシーはイースター蜂起には同意できなかったからである。そして1923年、劇作家として初めて立った時に、彼は名前を Sean O'Casey と再び変えた。

2 ダブリン三部作はなぜダメなのか

オケイシーは、1916年の復活祭蜂起から、対英独立ゲリラ戦争（1920年）、さらに対英講和条約をめぐる内戦（1922年）までを背景にした、いわゆるダブリン三部作——『狙撃兵の影』（1923年）、『ジュノーと孔雀』（26年）、『鋤と星』（26年）——で一挙に名声を獲得する。しかしながら、それらの作品では復活祭蜂起から内戦までの政治的事件は、「壁紙のごとき背景」であって主題ではなかった。主題はアイルランドの貧しい共同住宅に住む都会の人々の姿を描くことにあった。

まず、三部作の概要を見てみよう。

The Shadow of a Gunman——A Tragedy in Two Acts——では、登場人物は11人で、そのうち8人が共同住宅（tenement）の住人である。その他は家主と爆弾を預ける IRA（アイルランド共和国軍）の男とその共同住宅を襲

撃する（英兵よりも凶暴で恐れられていた）弾圧部隊ブラック・アンド・タンである。

「街頭にはカーキ色の軍服と鉄かぶとをかぶり、短剣をつけたライフル銃をもった英兵やブラック・アンド・タン（ならず者をかき集めた部隊）やダブリンの警官や私服警官などがあふれ、有刺鉄線がはられ、軍用トラックや戦車などが待機する非常警戒線が街のあちこちに敷かれ、夜ともなるとサーチライトが家の正面を照らし、トラックが止まればその家が武装した兵士たちの搜索をうける」⁽⁴⁾ という情景が日常化しているアイルランド。そのアイルランドの独立を願う共和主義者のシン・フェイン党と英国とのゲリラ戦争を背景に、この戯曲は書かれている。

共同住宅に住む Donal という 40 歳くらいの詩人が IRA の狙撃兵の逃亡者として周囲の者からみなされている。軍隊の襲撃をうけて家具などが損傷をうけることを恐れた家主は立ち退きをせまるが、その詩人を逃走中の狙撃兵と思いこんだ、同じ共同住宅の住人である娘 Minnie (23歳) はその男に熱をあげる。ところが詩人の相部屋の行商人シェーマスの所に友人が訪ねてきて、かばんを預けていく。実は、その訪問者こそ IRA の狙撃兵であって、英軍の待ち伏せにあって殺される。彼の預けたかばんに爆弾が入っていた。その日の夕方、英軍の手入れがあって、若い娘 Minnie はそのかばんを自分の部屋に隠すが、英兵に見つかり連行される。が、英軍のトラックから逃げ出そうとして射殺される、という悲劇である。

「理想主義的で、臆病な男と、実際的で有能な女」というのがダブリン三部作の共通なテーマでもあるのだが、特にこの戯曲にはシングの『西国の伊達男』との類似性が感じられてならない。「西国の伊達男」は実際は意気地なしの男にすぎないのに、ほらを吹いて周囲の者から過大評価されるのだから。この戯曲の主人公もロマン派の詩人シェリーにあこがれるへぼ詩人として設定されている。そして、若い娘 Minnie もその三流詩人に熱をあげ、生命までも犠牲にしてしまうのだ。まことにアイルランド人はいつまでも夢想家で、自己欺瞞的であって、現実を直視することを知らない国民なのだ。だから行動にはむかない。

この戯曲に関して、尾島庄太郎氏は次のように書いている。「在来のアイルランド劇の題材は主として農民を背景としたものであった。オケイシーは、劇の題材を農民から、長屋住居の町民にうつした。ダブリン市の貧民階級の生活

は、在来のアイルランド劇の伝統題材と同じく、オケイシーによって生氣あるものとなった。ダブリンには、この町に特有な貧民生活がある。また、この町独特の社会相がある。彼はその生活と、その世相とを舞台にのせた最初の大劇作家である。(中略)『銃士の影』のなかでシェーマスは「今では、あいつらは数珠玉を数えるかわりに弾丸を数えている。聖母マリアさまってなことを叫んだり、主の祈りをいったりしていた連中が爆弾を投げている。爆弾を投げて、機関銃の音を響かせている。いまでは、彼らの聖水はガソリンだ。聖餐式は燃え上がる建物だ。祈りの文句は軍歌だ。そして、彼らの信仰ときちや、天と地との造り主、全能なる大砲を信ずるにあるんだ。——しかも、それがすべて『神の光荣とアイルランドの名誉』のためなんだから」という。このような青年たちが出ようとは革命以前のアイルランドには全然予想されなかったのである」⁽⁴³⁾。

まことに卓見である。イエーツなどの文芸復興派はアイルランドの芝居を「題材としてはアイルランドの神話・伝説を取り扱うこと、精神としては神秘的なアイルランドの特性を表すこと」⁽⁴⁴⁾としていたのであるから。紙幅がないので以下はしよるほかないが、

Juno and the Paycock—A Tragedy in Three Acts—の登場人物は18人で、そのうち半数の9人がダブリンの共同住宅の住人である。20世紀初頭のダブリンの共同住宅は世界でも有数のスラム街だったはずである。尾島氏の前掲書には「1914年にはダブリンの人口が40万であったが、そのうち一室に住んでいる家族が2万1千家族であった。1924年にはそうした家族の数が4万になった。そして、一つの共同家屋には平均84人の子供がいたのである」(p. 302)と書かれている。その他は主人公 Boyle 家をだます学校の教師や、家具屋の店員や IRA の兵士などである。

Boyle (60歳)は働かないで、酒ばかりのんでいて、そのくせ「孔雀」(*Paycock* はアイルランドなまりの表記)のように歩きまわり、威張りちらしている。そのくせ仕事が見つかり、脚が痛むとって逃げまわる男である。妻の Juno (45歳)は夫 Boyle に言わせれば、

“Juno was born an' christened in June, I met her in June, we were married in June, an' Johnny was born in June, so wan day I says to her, 'You shoud ha' been called Juno', an' the name stuck to her ever

since.” (p. 65)

ということであるが、(ギリシャ)ローマ神話を踏まえていることは確かであろう。秩序をつかさどる女神 Juno (ヘラ) は浮気ばかりしているジュピター(ゼウス)の正妻であり、孔雀は bird of Juno ともいわれるように Juno に捧げられた鳥だからである。(テキストの注による。p. 503)

彼ら夫婦には子供が二人いて、娘の Mary はストライキで職を失い、息子の Johnny はイースター蜂起に参加して片腕を失い、腰は弾丸をうけて碎かれ、働ける状態でない。そこへ遺産相続の話がもちこまれ、喜んだ Boyle は借金をして家具などを買うのだが、その話はデマであった。そのうえ Mary はそのデマ話をもちこんだ学校教師にだまされて妊娠し、Johnny は IRA から呼び出されて裏切者として処刑される。それにもかかわらず夫 Boyle は飲んだくれて、彼の “th’ whole worl’s.....in a terr.....ible state o’chassis!” (p. 101) (この世はひどい混乱よ) というセリフで終わるのである。Juno は夫と娘と息子に裏切られながらも、生きつづけなければならないのである。この作品は共同住宅の住民たちの描写はいっそう巧みになっているが、それだけ政治性はうすれている。

*The Plough and the Stars—A Tragedy in Four Acts—*の登場人物は15人、そのうち8人が共同住宅の住人であり、他にアイルランドの共和主義者が二人、英兵が二人などである。れんが職人の Jack と Nora の若夫婦が主人公で、Jack は理想主義と虚栄心で指揮官に任命されると喜んで CIA (アイルランド市民軍) の集会に出かけて行く。二幕で高尚なナショナリストの集会と、卑俗な酒場が対照的に描かれる。その数ヵ月後、現実にイースター蜂起がおこり、砲撃の音などが聞こえる。共同住宅の住人には共和主義者も王党派もいるのだが、略奪のチャンスとばかりに出かけて行く。やがて Jack が瀕死の重傷の仲間をつれて戻ってくるが、妻 Nora の必死の哀願にもかかわらず、Jack は仲間を裏切ることができずに再び仲間と去って行く。そのショックで Nora は死児を生む。そこへ蜂起軍の隊長がやってきて Jack の死を告げたので Nora は狂乱し、「死んだ夫と赤ん坊を返してくれ」と錯乱する。更に、二人の英兵がやって来て、Nora を慰めていた王党派の女性 Bessie が窓際にいたために IRA の狙撃兵と誤解されて射殺される、という悲劇である。

しかし女主人公 Nora を『ハムレット』の狂死したオフィーリアになぞらえ

ようとしたせい、主人公夫婦が25歳と22歳と若すぎるのが気になる。イースター蜂起の悲劇や人生の重みをに成るには二人はあまりにも若すぎるのだ。それに革命の大義に殉じる夫と、心配のあまりに戦いに参加している夫を夜中に探しに行く妻の、別れの愁嘆の場などはおかげでセンチメンタルすぎる。現に Nora は当時のアイルランド女性の感情を代表していない、という批判があったくらいである。(I) p. 169) やはり人生の悲劇をに成る主人公になるには Juno くらいの年齢が必要なのではあるまいか。アームストロング氏は次のように書いている。

「逆説的であるが、オケイシーが蜂起のあいだもっとも勇敢な人々と見たのは、非戦闘員、特に女たちであった。ノーラ・クリテローは、戦闘中勇敢にも夫を捜しに行き、制服をつけた愛国者たちを行動させているのはほんとうの勇氣ではなく、こわいと認めることをこわがる恐怖心であることを発見する。劇中もっともヒロイックな人物は、ベシー・バージェスという、酒好きの、意地悪な、しかし大胆な、プロテスタントの小母さんである。彼女は気の狂ったノーラをまもり、弾が飛んでくる窓からノーラを引きはなそうとして自分が致命傷をうける。死を前にして彼女はキリストの血と救いを歌う歌を二、三行口ずさむ。この劇の究極のかくされた意味は、真の救いは彼女のような本能的慈悲心から生まれるのであって、愛国的弁士の大げさな救いへの呼びかけによってなされる流血からもたらされるのではない、ということである」⁽⁶⁾。

この戯曲は上演前から俳優たちの反対にあい、修正を迫られていた。一幕の若夫婦のラヴ・シーンは修正され、二幕の娼婦の歌はカットされ、それでもこんな共同住宅の下品な女の役を演じるのはいやだの、こんなセリフは口に出せないなどの反対が続出し、最後に snotty (鼻をたらした、うす汚い) の単語一つをめぐってもめたのだ。(I) pp. 164~5) まさにジョイスの *Dubliners* と同じである。『ダブリンの人々』の場合も出版社からあれを削れ、これを修正せよと苦情が続出し、最後には bloody (いまいましい) という単語一つでもめて、その本の出版が9年間も遅らされたのだから。

また、上演中に観客の暴動がおこった点では、シングの『西国の伊達男』騒動と似ている。粗筋では書かなかったが、二幕のバブ(酒場)の場面に若い娼婦 Rosie が登場することに観客は腹をたてたのである。シングの場合では女性の下着のシュミーズを意味する shifts という単語ひとつでもめて暴動になったのであった。アイルランドの民衆はカトリックの偽善と欺瞞の清教主義にどっ

ぶりとひたりきっていたのだ。

また、酒場にアイルランド義勇軍や ICA の兵士が入りこむのがけしからん、特にアイルランドの神聖な、緑、白、オレンジの三色旗が酒場にもちこまれた前例はない、と観客は非難した。(I) p. 169) 三色旗と同時にアイルランド市民軍 (CIA) の「鋤と星」の旗(この芝居の題名はそこから来ている)も持ちこまれているのだから、三色旗に対するアイルランド人の感情はひときわ異なったものがあるのであろう。要するに、酒場などといういかがわしい所に、共和主義者などが入るはずがない、という偽善・欺瞞なのだ。

もっとも二幕のバブの場面にはオケイシーの底意地のわるい悪意が感じられることも確かなのだ。時折、バブの窓に共和主義者の指導者のシルエット姿がうかび、愛国的弁士の演説が断片的に聞こえてくるのだが、(その演説はイースター蜂起の最高司令官であるピアスの満説集をアレンジしたものだ)酒場の世界を背景にすると、その演説はあまりにも現実離れしていて、そらぞらしく聞こえてしまうのである。天国と地獄とでもいうか、高尚な、夢のような理想の世界と、貧困にあえぐスラム街の人々の現実の世界とを対比させれば、高尚な夢の世界が浮きあがって見えることは確実なのだから。

最後に、この戯曲の死者は4人。Jack と Bessie と Nora が生んだ死産児、それに今まで述べなかったが、結核で幼くして死んだ Mollser。彼女の母親は雑役婦で病気の娘を部屋に置いたままバブに出かけて気炎をあげるような熱烈な共和派だった。みずから選んだ道を歩いて死んだ Jack を別とすれば、他の三人はまったくの無益な死なのだ。特に Mollser の死は医学か、貧困という経済の問題であろう。死産児を生むということもいくらか栄養不良と関係があるとすれば、それもまた貧困の問題となろう。とすれば、当時のアイルランド国民の敵は英帝国主義の支配もさることながら、経済的貧困も敵であったと言えないだろうか。

しかし、わたしにはダブリン三部作が好きになれないのだ。それらがあまりにも暗くて読んでいて気が滅入ってくるということもあるが、イースター蜂起から内戦までの政治的テーマが真正面からは取り上げられずに、「壁紙のごとき背景」に押し込められてしまっているからである。これでは読者ないし観客は欲求不満におちいるばかりで、カタルシスを感じることはできなくなってしまう。それに時代と場所というか、状況がわれわれ現代の日本の状況とあまりにも違いすぎるというか、ガダマーやヤウスの「期待の地平」という大げさな概

念を借用するならば、作品を読んだ時の「期待の地平」が今の日本人と当時のアイルランド人とではあまりにも違いすぎているということである。現在の日本人にはこれらの作品を注釈なしで、自立した作品として読むことはほとんど不可能であろう。作品としての自立性を欠いているようにみえること、そこがわたしには不満なのである。

3 英国への亡命——The Silver Tassie をめぐって

4作目の *The Silver Tassie*——A Tragi-Comedy in Four Acts——は、ダブリン三部作とは、がらりと変わっていて第一次世界大戦（1914～18）の悲劇を描いたものである。『鋤と星』騒動で嫌気がさして英国での受賞式をきっかけにオケイシーは26年3月に英国に渡り、そこでアイルランド人の若い女優を見染めて結婚し、英国に居をかまえていた。だからこの作品は英国で書かれたものである。

一幕の場所は Heegan 家の一室となっていて、共同住宅ではない。話される英語も三部作のように強烈なダブリンなまりの英語ではなくて、ごく普通の英語である。粗筋をのべれば、一幕はサッカーの試合で二度も優勝に貢献して *Silver Tassie*（銀杯）をもらった若者 Harry（25歳）が、戦場から休暇をとってサッカーの試合に出場し、三たび優勝し、恋人 Jessie を腕に抱き、銀杯にワインを注いで飲んで、また出征してゆく。二幕は表現主義的な手法で名高い場面である。場所はフランスのある戦場で、兵士たちは疲れきっていて眠くてたまらない。そこへ訪問者がやってきて伍長の案内で視察しゆく。登場人物の大部分は、第一の兵士、第二の兵士などと記されているだけで、名前も性格もない。plot もなければ action もない。ひとつのセリフを各人が短く分担したりして、日本の歌舞伎に似ている点もある。それに歌がふんだんに入っていて、ミュージカル風になっている。

三幕では主人公 Harry は背髄を損傷して、下半身が麻痺して車椅子に乗っている。かつて彼に好意をよせた女性 Susie は、今は志願して看護婦となって同じ病院にいるが、若い医師と親しくなっている。Harry は明日に手術をうけることになっていて、母親たちが見舞いに来るが、かつての恋人 Jessie は来なくて、戦友 Barney に花束を届けさせただけだった。四幕はフットボール・クラブの一室でのダンス・パーティの場面で、周囲の人々は Harry は出席

しない方がよいと思っていたが、Harry は出席し、銀杯でワインをのむまで帰らないと言う。それで銀杯が持ってこられ Harry はワインをついで飲み、昔ながらにウクレレをひいて歌をうたう。だが、Harry が帰宅する前に、かつての恋人 Jessie と戦友 Barney がいちゃつくのを見て、Harry は二人をなじり Jessie を whore (娼婦) とののしったので Barney と喧嘩になる。その後 Harry は銀杯を手にとり「おれと同じくめった切りにされ、かたわになれよよい」と言って、床に投げ捨て車椅子で押しつぶす、という話である。

しかしながら、この戯曲はイエーツらを中心とするアベイ座には受け入れられず、上演を拒否されてしまったのである。ノーベル賞をもらって、権威・権勢を高めていたイエーツには、オケイシーは抗すべくもなかった。

イエーツは次のように言う。

I read the first act with admiration ; I thought it was the best first act you had written.....The next night I read the second and third acts, and tonight I have read the fourth. I am sad and discouraged. You have no subject. (中略) I cannot advise you to amend the play. It is all too abstract, after the first act ; the second act is an interesting technical experiment, but it is too long for the material ; and after that there is nothing. ((I) 1928年4月20日)

バーナード・ショーはこの戯曲を絶賛しているのだが ((I) pp. 284~5)、なぜ主題 (subject) が無いと言うのか、なぜ一幕がよくて四幕が駄目なのか、イエーツはまったく説明していない。なぜ不具になった Harry が、かつて美酒を味わった銀杯 (青春と健康のシンボル) をこわしてはいけないのだろうか。実は、一幕には Harry の戦友で、同じく休暇をとって一時帰国した Teddy (後に盲目となる) が、戦場復帰を嫌がって荒れ狂い、結婚記念の杯をこわす場面があるのだ。それなのになぜ一幕がよくて四幕が駄目というのか。もっとも四幕で Harry がワインを注いでのんだ銀杯を投げ捨て、破壊するというのは、キリスト教の信仰に対する冒瀆だという批判が (後に上演された時に) 宗教界から出るのだが⁹⁾。周知のように、キリスト教ではワインはイエス・キリストの血であり、銀杯は聖杯を意味しうるからであろう。イエーツもそのような危惧を感じとったのであろうか。

とにかくこの戯曲は三、四幕がなければ芝居にならないのだ。この戯曲の主題は反戦ではなくて、「冒険の余波・影響」であって、「健康な人間は不具の人間を拒否し、心の平静さのために忘れ去ろうとする。若い女たちは新しい男を求め、老人たちは依然として昔の歌をうたい続ける」ことを書こうとしたのだ、という説もあるくらいなのだから⁷⁾。

Susie が幕切れに言うセリフ——「わたしたちは生きてゆかねばならないのだ」——が印象的だ。

It is the misfortune of war. As long as wars are waged, we shall be vexed by woe; strong legs shall be made useless and bright eyes made dark. But we, who have come through the fire unharmed, must go on living. [*Pulling JESSIE from the chair*] Come along, and take your part in life! [*To BARNEY*] Come along, Barney, and take your partner into the dance! (p. 248)

次に、イエーツはこの戯曲が反戦劇であることが気にいらぬせいか、「おまえは戦場に立ったこともなければ、病室を歩いたこともないではないか」(知りもしないことを書くな!)とオケイサーを叱りとばして、

There is no dominating character, no dominating action, neither psychological unity nor unity of action

と、ないないづくしで批判し、

The mere greatness of the world war has thwarted you; it has refused to become mere background, and obtrudes itself upon the stage.....the whole history of the world must be reduced to wallpaper in front of which the characters must pose and speak. ((I) p. 268)

という有名なセリフをはくのだ。イエーツの文学観によれば、全世界の歴史が(背景としての)壁紙に還元されなければならないことになる。つまり、戦争であれ、内戦であれ、政治的な出来事は文学の主題となってはならないことに

なる。しかし、断じてそのようなことはないし、そうあってはならない。イエーツは100パーセント間違っているのだ。前章でわたしはダブリン三部作で政治的事件が真正面に取り上げられていない不満をのべたが、逆に言えば、ダブリン三部作では政治的出来事が背景としての「壁紙に還元され」ていたからこそ、イエーツの眼鏡にかなったのだとも言えよう。処女作『狙撃兵の影』が採用されるまでに、オケイシーはいくつかの作品をイエーツの主宰するアベイ座に送っているのだが、それらはみな拒否されていた。幻想劇だったりして、リアリズム好みのイエーツには合わなかったからであろう。イエーツに悩まされ続けてきたオケイシーは、断固として反論の手紙をイエーツに送りつける。

I have pondered in my heart your expression that “the history of the world must be reduced to wallpaper,” and I can find in it only the pretentious bigness of a pretensions phrase. I thank you, out of mere politeness, but I must refuse even to try to do it. That is exactly, in my opinion (there goes a cursed opinion again) what most of the Abbey dramatists are trying to do——building up, building up little world of wallpaper, and hiding striding life behind it all..... (中略)in my opinion——an important one——“The silver Tassie”, because of, or in spite of, the lack of a dominating character, is a greater work than “The Plough and the Stars.” ((I) p. 272)

そして、すでに英国に居住していたオケイシーはアイルランドを永久に去る決意をする。それはアベイ座を牛耳るイエーツ一派との訣別であり、カトリック司祭たちの偽善的で、欺瞞的な清教主義との訣別であったが、同時にアイルランドの共同住宅を失い、根なし草になることをも恐れぬ訣別であった。かつてわたしは拙書『IRA』の中で「シングがイエーツの忠告を受け入れて、未開の西部地方を舞台にした芝居などを書いて成功した典型とすれば、ジョイスはイエーツをまったく無視してダブリンから大陸へ向かった男。そしてオケイシーは前衛劇を書くことを希望しながらも、土着の芝居を書くようにとのイエーツの忠告に悩まされ続けて、才能を空費してしまった可哀そうな男に思えてならなかった。アイルランド人は自己の本体をどこに求めるべきか、常に探しあ

ぐねているように思える。ケルトの伝統を求めて西部地方に行くべきか、英国と一体化すべきか、はたまた英国をも通り抜けて中央ヨーロッパ文化を志向すべきか、と。」(p. 47)と書いたことがあるが、オケイシーはあまりにもイェーツに悩まされ続けたのである。

その翌29年、ロンドンで初めて“Silver Tassie”が上演された。29年にはウール街の株の暴落にはじまる経済大恐慌がおこり、30年代はファッションとそれに対抗する共産主義の時代となった。オケイシーも共産主義者になり、芸術至上主義を捨てて、共産主義の宣伝のような作品を書いた。“The Star turns Red”(40年)“Red Roses for Me”(42年)などは、題名を見ただけでもオケイシーの思想傾向が分かりそうだ。前者はクリスマス時における共産主義者のRed Jimに導かれたストライキと、それに対抗するファッションとの闘いを描いたもので、労働者の革命の可能性を象徴するかのようクリスマスの「星が赤く変わる」という話であり、後者は自伝的色彩の強い作品といわれており、1911年のダブリンでの鉄道員のストライキを描いたもの。主人公はイースター前夜に警官隊との闘争で殺されてしまうという話であった。

4 “Cock-a-Doodle Dandy” 論

やっと本論にたどりついた。『コケッココー伊達男』は、第二次世界大戦後に書かれた最初の作品であり、出版、上演は49年である。オケイシーは69歳になっていた。この戯曲では幕(Act)という用語にかわって場(Scene)という用語が用いられている。三場とも同じ場面だからであろう。この戯曲はアリストテレスの三一一致の法則に従って書かれている。三一一致の法則とは、周知のごとく、(1)時間は一日以内、(2)場所は一都市、(3)プロットは一行動、というものである。『コケッココー伊達男』の場合は、(1)時は「夏の晴れわたった一日」の朝、昼、夕方であり、(2)場所はYadnanaveという架空の村。ゲーリック語らしく、テキストの注によると、“Nest of Saints”という意味だそうだが、裏には“Nest of Knaves”という意味も含まれているとか。(注、p. 530)(3)プロットはカトリックの聖職者たちを中心とする「死に向かう力」を代表する勢力が、Cock(おんどり)やその感化をうけた「生に向かう力」を代表する女性たちを村から追放する話である。

舞台は母屋が見える主役の一人 Michael Marthraun 家の前庭で、そこは塀

で囲まれ、夏の美しい花が色とりどりに咲き乱れていて、エデンの園のような所である。そして、旗竿にはアイルランドの三色旗がへんぼんとひるがえっている。(49年はアイルランドが共和国、つまり英国からの完全独立を宣言した年である。)夏の晴れた一日で、アコーディオンによるダンス音楽が聞こえる。そこへ Cock が踊りながら入ってくる。舞台写真をみると人間くらいの大きさ。勿論、ぬいぐるみの雄鳥だから当たり前かもしれないが。にわとりだから人間の言葉は話せない。ただ、鳴くだけ。時折、舞台に登場するだけであるが、雷や風をひきおこす大変な超能力を発揮するのである。老人たちには悪魔の化身のように恐れられ、忌み嫌われるのであるが、若い女性たちには享樂すべき人生の化身として大変な人気がある。題名にも伊達男と書かれているように、おしゃれで、黒い羽に黄色い脚とくるぶし、緑色の翼に真紅のとさかをつけている。

この芝居は年令や服装などの外見が重要なのだ。外見がその人物の内面を反映しているからである。主要な人物の外見をざっと見てみよう。まず「死に向かう力」を代表する者から。

(1) この家の主人 Michael は60歳くらい。黒っぽい服装をして、金持ちの印か、重たい金の鎖をチョッキにつけている。口を開けたままにしておくと、唇が神経質そうにひきつける。彼は村の小資本家であって、沼地の泥炭を売る商売をしており、村議会議員でもある。つまり、この土地の政治、経済の代表者であり、教区司祭と手を組んでこの土地を支配しているのである。

(2) 彼の仕事の相棒でもある Sailor Mahan は50歳すぎ。かつて船乗りだったせいで、日焼けして、さわやかな顔色をしており、あごひげを生やしている。態度、身のこなしに海のそよ風の気配がする。明るい青色のシャツに、紺のダブルの上着で、首に白いスカーフを巻き、明るいグレイのズボンをはいている。彼は今は Michael の泥炭を運ぶトラックの運送屋をやっている、運転手に賃上げを要求されているので、Michael に手間賃の値上げを要求しているところなのだ。

(3) Shannar は、しわくちャの、大変な老いぼれで、背中が曲がっていて、白くうす汚いあごひげを生やしている。うす汚い恰好をしている、身分の低い説教師で、ラテン語をつかうベテン師である。

(4) Father Domineer は40歳位の教区司祭で、この土地の最高の権力者である。聖職者の着る外出着をまとい、トラック運転手を殴り殺すような、ひど

い聖職者である。

その他にも、若い連中として、司祭の従者の片目の Larry とか、村の触れまわり役の男などがいる。

彼らとは対照的に、「生に向かう力」の人々は、男も女も若くて、美しくて、色とりどりの派手な服装をしている。

(1) Loreleen は年齢は書かれていないが、「とても魅力的な若い女性」で、緑色のドレスを着て、スカートの脇に赤い飾りをつけている。雄鳥のとさかのような形の緑色の帽子をかぶり、茶色の絹のストッキングをはいている。Michael の最初の妻の子供で、英国婦りである。彼女の名前は、ハイネの詩で有名な、ライン河に投身自殺して魔女となり、舟人を誘惑するローレライの響きがある。(注、p. 530) だから彼女が三場で元舟人の Mahan を誘惑して、この土地からの脱出をはかるのであろう。彼女は踊りと文学が好きなのだが、持っていたジョイスの『ユリシーズ』を教区司祭に発禁本として没収されてしまう。

(2) Lorna は Michael の後妻で、「夫よりもずっと若く美しい」と書かれている。

(3) 下女の Marion は20歳ぐらいの美しい女性で、下女のかぶる帽子の代わりにリボンを頭に巻いていて、ミニ・スカートをはいている。

(4) Marion の恋人で郵便配達夫の Robin Adair はグレイの上着に真紅の翼のような飾りをつけ、緑色のベレー帽をかぶり、足には緑色のサンダルをはいている。彼は Messenger と書かれているように、「神の使い」でもあって、彼のかなでるアコーディオンは若い女性達に生気を吹きこむのだ。彼は公衆の面前で Marion にキスしたかどで(当時のアイルランドではそれはタブーで、罰に値することだった)、牢屋に一月もぶちこまれていたのだ。(ちなみにジョイスも『若き日の芸術家の肖像』の中で手風琴のメロディを芸術の象徴として用いている)。

ごく簡単に粗筋をのべるならば、一場で Cock や英国婦りの Loreleen が Michael の屋敷に登場するようになってから、不思議な現象ばかりがおこるのだ。風が聖画像を吹きとばして、壁に変えたり、女たちの頭に角がはえたり、家が揺れたり、コップや受け皿が空をとんだりするので、驚いた Michael は下女の Marion に教区司祭の Domineer を呼びにやる。司祭が来る前に Lorna の病気の妹 Julia が市長などを先頭にして、担架にのせられてやって来る。こ

れからフランスのルルドの泉へ奇跡を求めに出かけて行くのだ。

二場は同じ場所の昼で、太陽は輝きわたっている。不思議な現象は依然として続いている。ウィスキー瓶が魔法にかかって、ウィスキーが出なかったり、色が変わったりする。その時 Loreleen がやってくる。彼女には黄金色の後光がさしている。楽しげなふりをして歌などうたっている男たちを見て「今晚の仮装パーティの練習なの？」と言って、家の中から仮装した Lorna と Marion をつれてくる。(人生の三楽は、酒、歌、女と言ったのは、確か宗教改革の立役者マルティン・ルターだと思うが。)そこへ Messenger がアコーディオンをもって登場し、音楽をかなで、一同はダンスをする。Michael は下女の Marion と、警官は Lorna と、Mahan は Loreleen と踊る。これは「生命のダンス」⁽⁶⁾として有名な場面である。だが、その最中に Domineer 司祭が現れたので、一同は驚いてダンスをやめ、這いつくばうが、Loreleen だけはしばらく踊り続け、Messenger も演奏を続ける。

Domineer 司祭は Mahan の会社で働いている運転手が、「女と同棲しているのがけしからん、解雇せよ」と Mahan に迫るが、Mahan は「彼は立派な労働者です。司祭さま。この国では彼のような人間を必要としているのです」と司祭の命令にそむく。このように Mahan は Michael とは少し態度がちがうのだ。例えば、二人の女性観のちがいは、Michael が「聖職者の最大の闘いは、美しい女たちの誘惑にうち勝つことだ」と言うのに対して、「女性の美しい顔や、魅力的な脚に邪悪なものはない」というのが Mahan の立場であった。また、「有徳の人間は四つの究極なこと——地獄、天国、死、裁き——を常に考えていなければならない」と Michael が言うのに対して、Mahan は「そんなことは神経をまいらせるし、人生を生きるに値しないものにすると反論するのだから、Mahan が最後に Loreleen に救いの手をさしのべるのも当然かもしれない。とにかく、そこへ当の運転手が仕事上のことでやって来て「女を追い出せ」と言う司祭の命令を突っぱねると、「おまえは司祭に反抗するのか」と怒鳴られ、その運転手 Domineer は司祭に殴り殺されてしまうのである。(現実に、このような事件があった由。)人を殺しておきながら司祭は醜い言い訳をし、警官はごまをするのだ。

三場は、同じ場面の夕方、太陽は沈みかけている。すべてが黒ずんでみえる。家が揺れ旗竿が揺れ、三色旗が倒れる。雷鳴がとどろき、稲妻が光る。皆がおびえるが Loreleen だけ平然としている。そこへ Domineer 司祭と

Michael が家から出てやってくる。二人ともびっこを引き、上着はぼろぼろ。Cock の厄払いをしていたのだ。「屋敷から邪悪な Cock を追い払ったから、安心して家の中に入れ。家庭こそ女にふさわしい場所なのだ」と言う。Lorna と Marion は従うが、Loreleen は拒否して、やがて逃げ出す。だが、しばらくして逃げた Loreleen が Mahan とともに捕まり、連れ戻されてくる。未婚の女が既婚の男と自動車に乗ってただけで、ふしだらと見なされ狂信的なカトリック教徒に襲われたのだ。だが、

“When you condemn a fair face, you sneer at God’s good handiwork,
You are layin’ your curse, sir, not upon a sin but on a joy.” (P. 400)

と Loreleen に欺瞞性をつかれると、Domineer 司祭は怒って「立ち去るか、死ね」と Loreleen に迫る。それで Loreleen は一人去ってゆく。だが、彼女は一人ではなかった。まず Lorna が、

“Loreleen, I go with you!Lift up your heart, lass: we go not
towards an evil, but leave an evil behind us.” (p. 401)

と言って同行を申し出る。ついで下女の Marion が二人と行動をともにするのである。

最後は、一場でフランスのルルドへ病気をなおす奇跡を求めに行った Julia が担架にのせられて、奇跡がないことに失望しながら戻ってくるところで終わる。Messenger は Julia に “be brave” (勇気をもて) と祝福を与え、恋人 Marion の後を追おうとする。「どこへ行くのか？」と Michael に問われ、「生命がここよりもっと生命に似ている所へ」と答える。「わたしにも忠告を！」と求められると「死ね。おまえみたいな連中がなすべき有益なことなどないのだ」と冷たく突き放すのだ。そしてアコーディオンをかなで、Marion 賛美の歌をうたいながら去って行くのである。

最後は一見 Domineer 司祭などの勝利のように見えるが、実は彼らこそ「生へ向かう力」の若い女性たちに見捨てられたのではないだろうか。この作品は悲劇のように見えるが、実は喜劇なのではないだろうか。

研究書によれば、Cock は ‘joy, courage, love, sexual ecstasy, vibrant

living' を表しているという⁽⁹⁾。また、Cock にも Messenger と同じく 'the spirit of God' が吹きこまれているし、この戯曲の背後に常に Messenger の音楽が流れていることは、'the spirit of God' が最後まで生きていることを示しているという⁽¹⁰⁾。

もう一度アームストロング氏の意見を聞こう。(pp. 34~5)

「赤いトサカと緑の羽をもった「おんどり」は、人々が抑制してはならない本能的・創造的衝動をあらわしている。つまり、男女間の愛と笑いと音楽・詩・ダンスといった芸術と結びついているのである。オケイシーは、登場人物を「おんどり」に対する反応のしかたで判断させようとする。劇の中心人物はローリーンである。彼女はトサカのような帽子をかぶっているの、登場すると同時に「おんどり」と結びついたものと見える。彼女は踊りと文学が好きである。彼女は、「おんどり」に象徴されるディオニソス的力と、彼女がマースローンとメーハンに向かって「財宝を死蔵」しないよう忠告するときのような台詞にあらわれるキリスト教とを、一つに融合させる。」

だが、「生へ向かう力」を代表する女性陣にも意外な弱点があるのだ。彼女らには金がないのである。Loreleen は Mahan から、この地を去るようにと忠告されると「お金がないの。40ポンドあったお金は父が銀行に預けてしまい、今は一銭ももらえないの」と答える。だから彼女は Domineer 司祭に「エデンの園の蛇のように土の中を這ってでも出て行け」と怒鳴られることになるのだ。Lorna は Michael と結婚する時に、親の遺産の泥炭の掘れる沼地を夫に与え、代わりに50ポンドの金を受け取ったのだが、病気の妹 Julia のルルドの泉行きの費用につかってしまった。Marion は下女だから給料はわずかであろう。つまり、女性たちには自立の経済的条件がないのである。

そして Julia のルルドの泉行きのエピソードに関しては、時間的におかしな点がある。一場の朝に出かけて、三場の夕方に帰ってくるというのは、いかにも無理なのだ。また、このエピソードは、ルルドの泉信仰という迷信的なものの無益さを嘲笑している（オケイシー自身も激しく批判している。注の p. 530 を見よ）と同時に、Julia の帰国はアイルランドが再びカトリックの迷信的なものに支配されることを、意味するようにもとれるのである。だからこそ「神の使い」の Messenger は「この土地は住むに値しない」とみなして去って行

くのであろうから。どうもすっきりしない挿話のように思えてならない。

この作品はオケイシー自身が一番気に入っていた作品であり、‘best’ だと言った作品である。

To me what it is called naturalism, or even realism, isn't enough.and so I broke away from realism into the chant of the second act of *The Silver Tassie*. But one scene in a play as a chant or a work of musical action and dialogue was not enough, so I set about trying to do this in an entire play, and brought forth *Cock-a-Doodle Dandy*. It is my favourite play, I think it is my best play⁽¹⁾.

わたしもそう思う。つまり『コケッココー伊達男』はオケイシーの最高の作品だと思うのである。さらにオケイシーは「その作品はアイルランドという場所で、アイルランド人の口を借りて語られている作品だが、その作品の精神は普遍的なものなのだ」というようなことを語っているのだが、まさにその通りだと思う。これは場所も時間も関係ない、普遍的で、象徴的なファンタジーであり、われわれ日本人にも自立した作品として読める作品なのである。アイルランド人の禁欲主義を理解するには、19世紀中葉の大飢饉による影響、つまり、田畑などを分散させないために、農村で結婚できる子供は長男と長女だけという事情を理解する必要もあるのだが、この作品ではそれほどこだわる必要はあるまい。それに、なによりも Cock や若い女性が乱舞する、明るくて、陽気な作品なのだ。現実にはあまりにも愚劣な悲劇が多いのだから、せめて芝居という舞台の中では明るい喜劇を楽しみたいと思うのは当然であろう。「壁紙のごとき背景」の知識をほとんど必要としない自立した作品であって、しかも面白くてためになる作品であるが故に、わたしはオケイシーの作品のなかで『コケッココー伊達男』が一番好きであり、最高の作品だと思うのだ。

5 おわりに

1958年の春に、ダブリンで国際演劇フェスティバルが催されることになり、アイルランドからはジョイスの『ユリシーズ』を戯曲化した *Bloomsday* と、オケイシーの新作 *The Drums of Father Ned* と、パリ在住のベケットの

三つのマイム劇が上演される予定になった。ところが、案の定、宗教界からジョイスとオケイシーの作品に「道徳的に疑わしい」ものとして反対の声があがった。そのうえ、驚いたことにアイルランドの労働組合評議会がカトリックの大司教の反対意見を支持したので、その年の2月、オケイシーはみずからの作品の上演を取り下げた。生涯をつうじて期待し、支持してきた労働組合までもが裏切るとは、オケイシーには夢にも思えなかったのではないだろうか。その三日後に当局によってジョイスの作品が却下された。それで、ベケットも作品を取り下げたので、その国際フェスティバルは世界中の笑いものになってしまったのである。しかし、怒りに燃えたオケイシーは死ぬまで（64年）アイルランドでの自己の作品の上演を禁止した⁽¹²⁾。

《注》

テキストは次のものを用いた。 *Seven Plays by Sean O'Casey Selected, with an Introduction and Notes by Ronald Ayling* (Macmillan, 1985)

- (1) *The Letters of Sean O'Casey*, volume (I) Edited by David Krause (Cassell, 1975)
- (2) *Lady Gregory's Journals* in "Sean O'Casey—The Man Behind the Plays—" by Saros Cowasjee (Oliver & Boyd, 1963) p. 30.
- (3) 尾島庄太郎『アイルランド文学研究』（北星堂書店 1976）pp. 303～4.
- (4) 勝田孝興『愛蘭文学史』（生活社 1933）p. 11.
- (5) W. A. アームストロング（小田島雄志訳）『オケイシー』（研究社 1971）pp. 18～19.
- (6) それに対する反論をオケイシーは "A stand on *The Silver Tassie*" と題して書いている。Cowasjee pp. 131～4.
- (7) Irving Wardle, *The Times*, 11 sept. 1969 in "File on O'Casey", Compiled by Nesta Jones (Methuen, 1986) p. 40.
- (8) James Scrimgeour, *Sean O'Casey* (Twayne Publishers, U. S. A., 1978) p. 159.
- (9) Cowasjee p. 207.
- (10) Scrimgeour pp. 160～1.
- (11) *O'Casey's Credo*, *New York Times*, 9 Nov. 1958 in *File on O'Casey* p. 89.
- (12) Gabriel Fallon, *Sean O'Casey—The Man I Knew—* (Routledge & Keagan Paul, 1965) pp. 184～8.
その他に Garry O'Connor, *Sean O'Casey—A Life—* (Hodder & Stoughton, 1988) を参照した。